

逸見直造・浪華のリバタリアン



この子にしてこの母あり

日本でも市民運動なるものは、ある程度定着したかに見える。最近（註・執筆当時）では既成政党に飽きたというので、「革自連」（革新自由連合）なるものが生まれているし、天皇は日本の着物というものを着たことがない、是非お召しになっていただくというので、永六輔らによって、「天着連」（天皇に着物を着ていただく市民連合）なるものまで出来ているそうである。

この市民運動なるものは大体日本では、ベトナム戦争を通じての「ベ平連」（ベトナムに平和を！市民連合）によって一般に膾炙かいしやされたと思われるが、さらに逆上れば起源はどの辺までゆくものであろうか――。

私自身は不勉強にして詳細は知らないのであるが、市民運動を広く解釈して大衆の日常生活くわつと解すれば、あるいは明治二十年代の自由民権運動あたりまで、溯行さくぎやうできるのかも知れない。しかし市民運動が市民意識を背景にしているものである以上、やはり富国強兵の明治期よりデモクラシーの大正期を念頭においた方が考え易いのであり、事実大正中期に至って、不特定多数の未組織住民を対象とした大衆運動が苛烈やくれつに行なわれていたのである。

その代表的存在として、私は大阪の逸見直造へんみ なおぞうを挙げたい。

逸見直造——といっても今では殆ど知る人もいないであろう。が、大正十年（一九二二）前後の大阪辺では大変な名物男であり、社会運動の方では圧倒的な人気があった人物である。直造は大正期社会運動の勃興に当って、社会主義伝導（教育）や労働運動とは別箇べつこにあり、ましてリヤク屋（掠奪の略、資本家からの掠奪）とも異なり、独自の力で不当に嘆く下町住民たちのために盛んに運動を展開していた。

ことに住民問題に関わるや、水を得た魚のごとく活動し、事実上日本人の中に住宅問題と借家人の権利意識を植えつけたのは、彼をもって嚆矢こうしやとするといつて過言でない。

しかもその運動の方法は、バラエティに富み、独創的である点において類をみないものがあつた。一般的に革命的であることと現実的であることは中々和解しがたいものであるが、彼の場合に限ってはさに非ず、過激にして且つ実地的であつた。大体性格的に親分肌の大らかな人柄であり、アナキズム系の運動家でありながら、同時に革新派の代表的性格をも持っていた。

その点、彼自身、若い頃若干つなりのあつたアメリカの女流アナキスト、エマ・ゴールドマンに似通っているのである。

息子の吉三さんによると、普選運動華やかなりしある夜半、直造のこうした資質と人気を気にして鐘紡（鐘淵紡績）の武藤山治むとう さんじが訪れてきたことがあるという。訪問理由は、立候補の意志のある武藤は、もし直造も立つとあれば強敵となるので、隠密に事前に、「どうかね、お前さん、出る気はあるかね」と打診にきた――。つまりそれほどに直造は当時の大阪においては、知名人だつた。

したがってその急死に際しても、各階の層が集まってきた。敵も味方もない（当時の新聞がそ

のように報じていた)。この時ばかり呉越同舟で人々が集い、葬儀の列は延々と数百メートル続き、葬儀の列の先頭がすでに阿部野の斉場に到着しているというのに、家の方ではまだ出立しない幾組もの参列者がうろうろしているといった状況だったのである。

このように真に大衆的な、日本の市民運動の草分け的存在としての逸見直造は、明治十年（二八七七）一月十五日、神戸に生まれたのであるが、直造の人と生涯を知るためには、彼自身の前にどうしても母親の美代のことを承知しておく必要がある。この子にしてこの母あり、生まれは江戸嘉永年間（一八四八―五三）の生まれながら、頭は時代の文明開化の精神に充たされており、名実ともに直造を産み出したのは母親美代であったといっても過言でないのである。

美代は神戸では、輸出用の岡山産花筵かえんを扱っていたという。恐らくこの時代に、彼女の海外に対する関心が開けたものである。その位置からしても、美代は当時の日本女性の中の最も新しい女の一人であったとする白井新平氏の意見に賛成である。

しかし明治十年、日本で初めて国内勸業博が開かれた折に東京へ上京した美代は、まだ呉服店時代の三越前のランプの街燈をみて「ほほう」と新鮮な驚きを得た。「何と明るいことか——」当時はまだ国内の照明の大半が種油を使つての行灯あんどんの時代であるというのに、ここでは石油を使用しているガス燈が立っている。田舎からの上京組の誰しもが驚くに決まっているが、美代のもう一つ違っているところは、これを見るや直ちに時代の行く末を察知し、器具の製造を思いつたことである。

それで明治十六年（一八八三）頃、兵庫から大阪の今宮村広田の森（現広田神社横）へ移つて、石油ランプの芯の製造を始めたのであるが、これが予想通り当つて、明治三十年（一八九七）頃には従業員を六十人も使うほどの製造業者になつていた。従業員六十人というとき、当時の大阪では五十人以上を使う製造業は五十に充たなかつたというから、かなり大手の業者であつたということになる。

つまり美代はその先見性と企業才によつて、それだけまでにのし上がったことであるが、しかし事業がそれほどまでに広がり、金にも不自由しないというのに、自分の子供たちには中等以上の教育というものをつけさせなかつた。その理由を尋ねると、美代のはるか幼児の頃にまで逆上ることになるが、彼女は大の官員（官吏）嫌いであつた。

美代がまだ四、五才の時分のことである。街道を参勤交替の大名行列が通つた。その時に幼女の美代もみなと同じく土下座してひれ伏していたのであるが、ふと顔を上げて辺りをキョロキョロ見廻した。途端にそれを見つけた供先ともさきの武士が、「無礼者めがー」と大喝して、美代をひっ捕えんとした。それで今度は美代が立ち上がつてワアワア泣き出して一層困つたのであるが、近所の婆さんが突差の行為で美代をひっ抱えて着物の裾に入れ、「お許し下さいませ。子供はもうおりません。おりません」と平謝に謝つて、ようやく事なきを得たということである。

美代は子供心に、この時の白刃をぬいた武士の恐ろしさがいつまでも刻みついた。そして生涯のサムライ嫌い、ひいては巡査嫌いの官員嫌いとなつたという次第である。

それで美代は自分の子供の将来についても、子供を仕込んで官途につかせるという当時一般の風潮に従わず、技術を教えて職人の道に進ませるか、身ひとつで立てる商人の世界に入らせよう

という腹積りで、子供達は何れも学校教育の場に送らなかつたのである。そして初心通り、養子にきた夫との間に生れた五男四女の子のうち、病弱で道楽者の長男を除いて、四人の男の子たちはそれぞれ小学校を終えるや、次々と兄の許へ送って刀鍛冶を修業させた。美代は岡山の刀劍商藤五郎の長女に生れ、次兄大吉（東洋）は著名な刀鍛冶であつた。

しかも美代の偉いところは、息子たちが修業から戻り、二十にして徴兵検査を終えるや、旅費だけ持たせて次々にアメリカに送り出し、海外の新知識を体で学ばせるといふ思い切つたやり方をとつたことである。

叔父、東洋の影響

美代はこういうハイカラにしてしつかり者の婆さんであつたから、後に直造がアカだといわれて、妹連中さえ近付きたがらなかつたのに、「日本の政府はバカだから、外国の知識を応用している人間のよさがわからないんや。子供のやつていることが正しい。巡查いてもかめへんからやれい」と激励していたという。目に一丁字なくとも、心眼の開いた女であつたのである。

かくて逸見直造は明治三十年、徴兵検査を終えるのを待ちかねていたようにして、アメリカへ旅立つて行つた。ただし与えた金は旅費のみ、後は向こうで自活せよといふわけである。その後特別な場合以外は、美代は一切送金しなかつたといわれる。

直造はこのような気丈夫にして典型的な賢母型の母親を持つたわけであるが、ここにもう一人叔父の逸見東洋の影響というものをみないわけにはいかないと思う。なぜなら直造自身少年時代に東洋の許で刀鍛冶の修業をしているわけだし、母親の美代の生き方といえども多分に兄に刺激されての生であつたと推察されるからである。東洋の没年は大正九年（一九二〇）十二月二十四日で、大正十二年（一九二三）に逝つた直造の生涯と殆ど重なつており、陰に陽に叔父に影響されざるを得なかつたはずである。

この叔父東洋に関しては、同郷の作家・本山荻舟が中編の伝記を書いていて、その生涯はかなり詳しくわかるのであるが、東洋、少年期より才気煥発にして性は放縦無頼、諸国を歩き歩いて人生修業をした。もともと刀屋の家に生れて、刀の魅力にとりつかれていたのであるが、十七才の折に近世の名匠と称せられた尾崎長門守の門に弟子入りし、二年足らずのうちに忽ち立派に古刀として通るほどの腕前を身につけて、師家を飛び出した。

それからの東洋は放蕩三昧、妻子が居ようと構わず、一旦わが家を出ては、いつ何時に帰るとも知れないヤクザ生活を送つていた。維新後廢刀令が出てからは刀鍛冶も仕事にならず、文人画に精を出していたが、ある年なんぞ、ぶらりと家を出たまま三年も家に戻つてこなかつたことがあるそうである。

大阪では柔道の旧師が道場を開いていたので、しばらくその食客となつていたのであるが、道場の休みの一日、道頓堀見物に行つて、そこで大ゲンカになつた。東洋は遊び人風の男十五、六人を相手に次々と右へ左へ投げ飛ばし、暴れ廻つたのであるが、遂に相手方はわつと引き下がつて逃げてしまつた。その翌日のことである。見慣れぬ俠客風の男が東洋の許に現れて、用件を聞くと、

「昨日は大先生とは知らず飛んだ失礼をしました。つきましては手前どもの仲間、てっとり早く「死にたい組」と申しまして六、七十人おりますが、組の頭だったもの寄り集りまして、どうかこの組の大親分になっていただきたいと思ひまして参上致した次第でございます……」

という話であった。

その真剣な言葉を聞いて東洋は、

「左様か」

と応揚にうなづいて、「それほどまでに頼まれるものを、むげに辞退もなりにくからう」と「死にたい組」の親分を引受けたものの、こればかりは師匠に大目玉をくらつてとがめられ、

「一旦約束の盃を交わしたからとあつては、彼らも承知しまい。今日にでもとつと国に帰れ！」と道場を追い出された。

さすが気の強い東洋もこの時ばかりは苦い思いをし、這這の体で郷里へ戻ってきたそうであるが、かく放蕩無頼の東洋にして、天稟の牙えは抜群であつた。本山の著、「近世数奇伝」によると次のようである。

「刀を打てば正宗（明治正宗）の異称をもらつていた「筆者注」といわれる外、東洋は習はぬ画をよくし、また書にも堪能で、山陽を学べば山陽になり、南洲に擬すれば南洲になつた。風雅の道に志すようになつては、茶の湯、活花をも愛し、殊に茶は千家表流碌々の斎宗左の皆伝を得た、吉田箏道の門に入つて、たちまちその奥儀を究めた。謡曲は観世を学んで、鼓、太鼓をよくし、その他琴をも弾けば、三味線にも堪能だつた。武芸、工芸、遊芸と器用の限りを尽したが、同時にま

た器用過ぎたのもあつた」

とりわけ彫刻の道にかけては天才的な腕前を發揮し、毛筋一本誤ちを許さぬ漆彫の堆朱、推黒の世界で大成をなした。その剛毅にして繊細極まる手法は各方面で珍重がられ、その作品は国内博覧会からアメリカの世界大博覧会にまで出品されていた。東洋畢生の大作「風神雷神」の番盆は、皇室に収められているということである。

東洋の父は果して如何なる人であつたか不明であるが、逸見家に流れるこの母、叔父の血は毛口に直造に受け継がれているとみられる。即ち開明的にして反官的、事業才があつて同胞的な点は母親美代に似、流寓無頼の心情に加うるに職人的（あるいは芸術家的）一刻さや俊敏さは叔父に酷似しているといえる。直造にあつては両者になかつたものはアナキズムであるが、これとても逸見の血とつながり、その浪漫的、理想的資質の、思想と接するところでアナキズムとなつたとみられる。

しかも個性と自由を謳うアナキズムにすら専属することなしに奔放に生きた直造ではあるが、その足がしっかりと大地を踏まえていた点においても逸見を顕わしていた。逸見家に流れる職人的（あるいは事業的）血筋は到底觀念の世界に遊離することを許さず、加うるに大阪で育つたという土地柄と、プラグマチズム（pragmatism）の国アメリカでの体験は、彼をして徹底して現実主義に向かわせたのである。

この逸見家の恰も相反するとき浪漫的傾向と現実傾向双方への血であるが、前者が屈折して長兄の儀三郎へ流れ、儀三郎は金があるままに遊興の巷で遊び呆け、結局、道楽の道で果てたと

いうことであるが、後者は息子の吉三に一層顕著に顕われている。

吉三さん(七四)は現在なお東大阪市大連北に健在なので(註・執筆当時)これまでにも、二、三度お会いし、今正月にもお話を伺うことができたのであるが、何と火の気の全然ない外の寒気が直接入り込むような六畳で、延々四時間半も語られたのにはこちらが参ってしまいそうであった。老いてなおこれだけの持続力、耐久力に、さすが往年の斗士とほとほと感心した。

しかもその話の内容たるや、自ら「悪の貯蔵庫みたいなものや」と言われる通り、法の裏表をかいくぐつての斗いの日々であり、体制に対するその現実的狡猾さに至っては、父親の直造以上のものと思われた。これまでに留置、入獄されたことが数十回(二、三十回ですか)と訊くと、「いや、そんなものじゃない」といわれる、ひどい時には一年の三分の一は入っていたという人であるが、まさに大阪の主義者の見本をみせつけられた思いがしたものである。

ところでアメリカに送られた直造はその後十年間いたが、その間まるで彼地に滞在したというわけでもなく、およそ二年置きぐらいに日本に帰ってきている。当時は徴兵検査前の未成年者は渡航制限があったから、弟たちが検査を終えるごとにアメリカから連れ出しにきたのである。そして三人の弟を渡米させる以外にも、大阪博やら嫁取りやらで美代の許に戻ってきていた。

地獄へゆきやがれ

アメリカでの直造は、初めカリフォルニア州サラトガの同郷人を頼っていた。そしてアメリカでは、今日の日本という各種学校の発達している国なのでコック学校に入って勉強し、パン職

人となり、また庭職やアップル栽培の農業労働にも就いた。

これは日本を出る時に、美代から「どこの人間だろうと喰わな生きてかれんのかから、向こう行いたら喰い物の勉強せい。それから喰い物の栽培を習え——」と言われてきたので、その通り実行したものである。

そして仕事を求めて直造は、北はカナダのバンクーバーから南は北米フィラデルフィアまで、おもに太平洋沿岸を歩き続けたのであるが、明治三十年(一九八七)頃の日本人のアメリカ移民などというものははじめなものであった(明治二十年代に行った人は、一財産つくっている人が多いようであるが)。大体移民には教育のない人が多い。大抵が漁業労働者、農業労働者、植木屋、散髪屋などといった低労働者に属していた。

当時為替レート一ドル八円ぐらいであったが、十日働いて人によっては半月分くらい溜めていた。どうやって溜めるのかというと、朝は早く街頭へ出てアスファルトに水道の水を撒いて洗ったり、ガラス拭きしたり、ゴミを集めたりする。こんな仕事でも二、三時間すれば一ドルくれた。それから工場へ行って一ドルか二ドル儲け、夕方また食堂、ホテルのような夜間営業やっているようなところ行いって、皿洗いでもするのである。

抜け目のない奴は、日本からピツと飛ばす一銭くらいのおもちゃを送らせて、公園や博覧会場などで四十銭(五セント)で売ったりして儲けたりもしていた。

そんなにして得た金であるから、使う方だって無駄に消費せず、ベッドなんかでも二人で借りて、昼夜交替で寝ていた。

直造は語学は出国前に天王寺辺にキリスト教の学校があつて、毎晩通つて勉強し、何とか日刊新聞くらいは読めるようになっていたのであるが、到着しては全然相手の言うことが解せなかつたということである。仕様ないから半年ほど農家へ行つて馬車に乗つて野菜運搬しながら、みよみまねで言葉を覚え、そのうちに夜間学校へ入つてパンを焼くことを覚えたものである。

パンを焼いている頃に、如何にも若い頃の直造らしいエピソードがある。それはある教師の家庭で、親類ともども住んでいる大きな家であつたが、直造は朝早くから起きておいしいパンを供していた。

と、そのうちに先生の奥さんが近所にふれ歩いていて噂が耳に入つてきた。「うちのジャップはおいしいパンを焼くんですよ。あなたのところも雇つたらどうですか。給料だつてアメリカ人の半分もいらぬですよ。」

この言葉を聞いて直造は頭にきた。そして主の先生が戻ると早速抗議に及んだ。

「ああなたの奥さんの言葉は、まるで日本人を人間とも思わない言葉じゃありませんか。それも普通のアメリカ人の家庭ならともかく、あなたのお宅のような教育者の家庭で、このような言葉が吐かれるのはもつてのほかです。今日かぎり辞めさせていただきますから、給料を精算していただきたい！」

まだ二十そこそこのジャップの烈しい言葉に主は驚いたものの、辞められては困るから給料を払わないでいた。すると直造は、給料をもらわないうで飛び出してしまった。

母親美代の実際的な性格とともに直造は、権力主義的な差別意識に対する美代の反抗的な血管

もまた受け継いでいた。ついでに珍しいもの好きというか、新しい事物に対するものおじしない点でも、親子似通つていたというべきであろう。

直造は日本へ帰国してからも、アメリカの博覧会で、棺桶のモデルとなったことを話しては笑いかけていた。

アメリカというところは博覧会好きで、毎月のようにどこかの州で博覧会をやっている。その博覧会に棺桶を出品していた会社が棺桶の中の人形代りに、本物の人間を入れようとモデルを募集したのである。その会社の名前は G. O. Heintz、おれんところの棺桶を使わない奴は「地獄へゆきやがれ！」というすさまじい名前の会社だつた。直造は時間が短くて金になるので、この会社に応募した。そして死装束をして、棺の中に横たわつていた。その棺というのは、中に立派な羽二重が敷きつめられ、バイオリンの上等のケースよりもなお立派だつた。これが評判を呼んだことはいまでもない。

明治三六年（一九〇三）、二人目の弟を連れに帰つた直造は、渡米するまでの間、大阪天王寺公園で開かれた第五回国内勸業博覧会で、西洋料理店サンセット食堂（日暮亭）を開いた。この食堂も美代の示唆によるものであつたが、経営的には大失敗であつた。アメリカ婦りを売り込んで、コックも外国船の司厨長を雇うというこりようであつたが、値段が何しろ一食一円と高級料理だつたので客が入らない。一日にせいぜい十人から二十人というお客で、さんざんの目にあつた。

これにこりたか直造は、明治三八年（一九〇五）にはシアトルで友人の中国人とともに、一食一〇セントの安めし屋を開店した。当時、シアトルで一食十五セントが普通であつたから、この下

層労働者目当ての食堂は大好評であった。

ところがある日、やくざのカウボーイたちが数十人客をよそおって入り込んで来て、店内で八百長げんかを始めた。やがて大乱闘となり、彼らは西部劇さながらに暴れ廻って、店を完全にメチャクチャに壊してしまった。直造は再起不能の大損害を受け、閉店せざるを得なかった。もちろん警察に届けてもどうにもならない。かえって、金が安いのは量が少ないせいだろうとなじられる始末。たのみの綱の日本領事館も、まったく頼りにならなかった。このことを契機に直造は、すっぱりと商売の道をあきらめてしまった。

商売をあきらめて直造は、アメリカの各地を転々と放浪しながら、その頃、全米に広がってきたIWW（全世界労働者組合）の運動を見聞したり、にわかには活発化してきたサンフランシスコ革命党の友人の影響を受けたりしていた。

逸見直造が初めて社会主義に触れたのは、明治三六年（一九〇六）の博覧会の時らしい。博覧会にドイツ、シーメンス社の機関車が出品されていて、ついできた技師がハナヤートといった。このハナヤートが手頃な下宿がなくて困っているというので、直造は自分の家に泊めてやった。その際に、ハナヤートからいろいろドイツ国内運動の話聞いた。

しかし彼の話は直造がそれまでの在米体験からするアメリカデモクラシーと比して、ドイツ社会主義は随分と異質なもののよう受けとれた。それに技師長の話が甚だ急進的であるのに、彼の日常生活が極めて穏健地味であるのに疑問を感じたというから、おの自ずとそこに直造の資質が現われていたというべきである。